

第2回淀川の魅力ある景観づくりに向けた検討会 議事概要

開催日時 : 平成30年9月19日(木) 9:30~11:30

出席委員 : 藤本委員、加我委員、石田委員、
久ノ坪委員、一本松委員

オブザーバー : 淀川河川事務所、淀川河川公園管理センター、大阪府、大阪市、高槻市、寝屋川市、
枚方市、島本町、京都府、京都市、八幡市、大山崎町

事務局 : 大阪府住宅まちづくり部都市空間創造室

【基本目標について】

- 方針の賑わいという言葉にひっかかる。流域全域が人が集まる場所ではない。様々な場所があるので、そこを考慮したものにするべき。
- 「ワンド等の位置をわかりやすく示し」など、方針としては、具体的すぎるのではないか。場づくりを行うくらいで止めておく方が良いと思う。
- 賑わいという表現は、人の量を多くすることと捉えられてしまう。人の量だけではなく、接触頻度や密度を高めることも必要ではないか。一人ぼっことする場所があっても良いと思う。
- 川とまちが一体になると、川とまちがつながることは別ではないか。私たちは川と人をつなぐ意識で活動している。そこに集まる人やファンを増やすこと。
- 「水辺の賑わい」とよく使うが、この場合の賑わいは、人が集まるとか経済効果ではなく、豊かな生態系を指している。生き物の視点も入れてもらいたい。
- 賑わいは経済効果に繋がるが、景観の検討をしているので、人と川が繋がることで新たな景観を創出することが目的ではないか。
- 世界の観光地は地元で愛されているところが多い。月に1回は淀川で休憩するなど、ライフスタイルを変えることが必要。川との関りを変えていく。
- 景観の検討会で打出す目標としては少しわかりにくい。まちづくりにどこまで踏み込むのかももう一度整理した方がよい。
- 目標のタイトルは景観の検討であることがわかるようにした方がよい。
- 基本目標は、「大河川・淀川の景観づくりにより、多くの人に与える様々な恵みの創造」みたいなものではないか。

【景観資源の発掘と整理について】

- 審査の最終は顔をあわせて行う方がよいのではないか。
- 調査に同行して感じたのは、毛馬閘門をもっと活用できないかということと、思いのほか、水上活動をしていたこと。
- 成果のとりまとめマップを船内で配ってはどうか。
- 資源の鉄道等は府民になじみのある線の名前まで書いた方がよいのではないか。

○調査の目的は、魅力の発掘で、問題、課題の発掘ではない。現地調査結果の記載が、課題発掘の表現になっている。

○人に開けたワンドがあれば、そのまま残っているワンドもある。看板を立てて、全ての人に来てもらう必要があるのか。

○水上アクティビティの水上バイクは危険。びわ湖では、遊泳場に水上バイクが入って死亡する事故があったりするので、ルール作りが必要。

○水上バイクは一津屋を除き禁止しているので、PRしていると誤解されないようにしたい。

○淀川そのものが景観資源でありその視点場がどこかという観点も重要。また、時間軸（朝陽や星などの見える時期等）や場所、それに視点場までのアクセス（船や電車などの手段など）についても整理するとさらに良いものとなる。

【景観資源の情報発信について】

○媒体は、インターネット、物、メディア、場の4つに整理できるのではないかな。

○グーグルマップと連携してはどうか。

○利用者が情報発信することを誘発させる取組みが必要なのではないかな。

○行政機関でやるものと利用者にしてもらうものの役割分担が必要。訪れた人はその様子を発信する、情報の確からしさは行政の役割。

○プロデュースできる人を入れるべき。ただの広告代理ではなく、淀川に愛着を持てる人でないといけない。

○淀川に関する情報が日本語しかない。台風被害の状況も外国人はわからない。海外への発信も視野に入れるべきではないかな。

○4ヶ国語で船内アナウンスすると最後の案内が終わる前に、その資源の前を通過してしまう。文字で案内する方が効果的。

○誰に向けて情報発信するのかで、媒体が決まってくる。

○実体験にともなう情報発信が重要。

○訪れた人にプッシュ通知が届くようなツールがあれば。

○有形の歴史資源だけでなく、無形の歴史資源もあるのではないかな。

○学校で紙媒体を配布するよりかは、教育という視点で行えると良い。

○景観の概念が、単に見るものから、人と一体になったものになってきた。

○景観の歴史は文献からわかるものだけではなく、地元の固有の情報、思いが大切。そういう情報をワークショップ形式で拾っている。

【景観資源を活用するための実施方策】

○江戸時代の写真等と今の資源を照らし合わせる等、どう演出するかが重要。

○乗船者のニーズがどのようになっているか。全ての人が歴史に興味があるわけではない。歴史ツアーも需要はあるが、定期的なものにはしにくい。

○誰が実施していくか。自治体なのか、プラットフォームなのか。まずはプラットフォームで取り組み、新たにやりたい企業に展開できるものがよい。多様な主体を入れることが重要ではないかな。

- 古いサインを除去しサインの統一など、景観阻害要素を除却する視点もいるのではないか。
- 景観をどうコーディネートするのか、将来像を描く必要がある。
- 船内アナウンスがいつも同じアナウンスでは、リピートは難しいと思う。
- 視点場をきちんとつくり、成果品には、場所と時間をプロットしておくべき。
- 動画での発信として、自然保全の活動等を発信してみるのの有効ではないか。
- 新しい写真や古い写真を照らし合わせてみると、まちの中にも昔の淀川の面影が残る箇所がある。
- 地元が立ち上げた地元の特化したサイトや地元根付いた愛着あるものとコラボするのも1つあるのではないか。
- プラットフォームのロゴマークがあれば意識を共有できるのではないか。